

第34回 全日本自閉症支援者協会 滋賀大会

第3分科会

「感染症や災害に関する利用者支援と施設運営」

⑳地震災害報告(平成28年 熊本地震)

社会福祉法人 三気の会
松本慎太郎

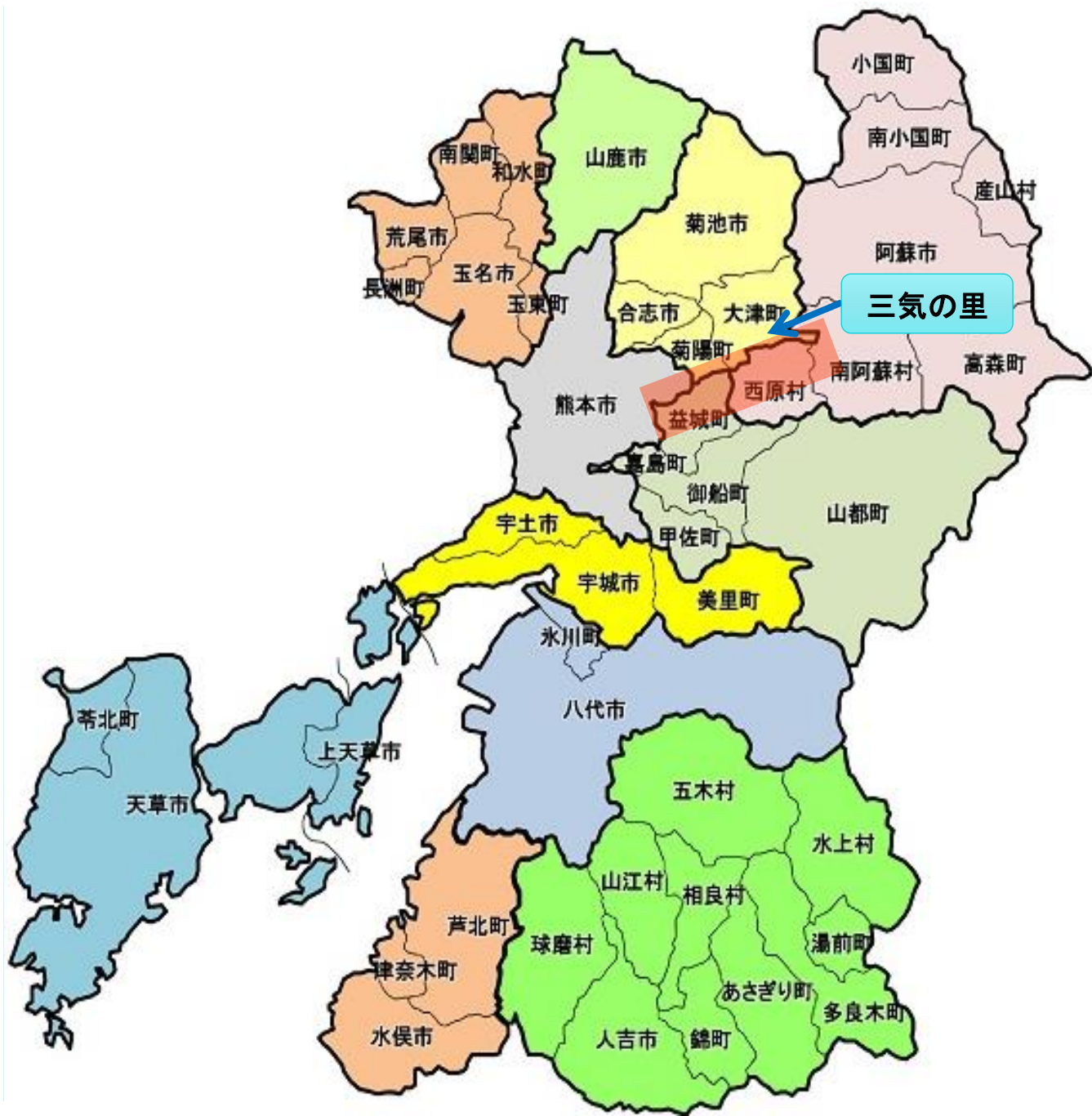
私と施設のプロフィール

私

- 41歳 就職して21年目 三気の里19年目

障がい者支援施設 三気の里

- 「自閉症という障がいの理解」「人として当たり前前充実した生活」
「親亡き後、安心して暮らせるように」という1人の自閉症の子を持つ親と多くの人との出会いにより、昭和62年5月1日に開所、35年目



社会福祉法人 三気の会



障がい者支援施設 三気の里



児童発達支援センター 三気の家



就労継続支援B型
Be TREE



地域活動支援センター
アンパ



グループホーム 3棟



熊本県北部
発達障がい者支援センター
わっふる



相談支援事業所 2ヶ所

利用者の状況

施設入所 66名（男性51名 女性15名） 平均年齢49才

生活介護 98名（入所64名＋GH9名＋在宅25名）

就労B型 13名（GH5名＋入所2名＋在宅6名）

地域活動支援センター7名（GH4名＋在宅3名）

自閉症の方は87名（診断されている方）

障害支援区分 平均5.77

ほとんどの方が、知的に重い自閉症の方で、強度行動障がいにも該当

療育方針

- 仕事や生活を通し、その人らしい社会生活を送ることができるよう、障がいを理解し、様々な療育、考えを学び、取り入れ、その人にあった支援を模索、研究し提供する。

人とやりとりができる

- コミュニケーション

自分をコントロールできる

- 自己コントロール

人と一緒に暮らせる

- 不適応行動の是正と軽減





シール貼り



手もぎ



農耕作業



野菜の袋詰め

日中活動



西松屋
ハンカチの袋詰め



フルーツネット折り



車部品のパッキン
(ゴム)はめ



海苔養殖用の製品

4/14 pm.21:26 前震(大津町 震度5強)

- 大きな被害はなかった
- GH(当時、利用者15名<1名は帰省していた>)
 - 食器などが散乱
 - 三気の里に避難
 - 男女に分かれ、布団を敷きつめ合って夜を過ごす

4/16 am.01:25 本震(大津町 震度6強)

停電、暗闇

- ・利用者 88名 (入所70名、短期入所3名、GH 15名)
- ・スタッフ 9名 (勤務者7名、施設長、残務1名)

※1時間以内の応援4名(支援員3名 事務1名)

地震直後の利用者の状況

利用者	様子
逃げ戸惑う 5名	<ul style="list-style-type: none">・外に出ようとする方・荷物をまとめてスタッフの側に来る方・大声を出して施設内を走り回る方・大声を出してスタッフに駆け寄る方・スタッフの側を離れようとしなない方
居室から出てきた 8名	<ul style="list-style-type: none">・自室で待機するように伝えると戻ることができている
常夜灯を気にする 2名	<ul style="list-style-type: none">・消えていると訴える方・いつ直るか訴える方
布団の中 40名くらい	<ul style="list-style-type: none">・地震後から声出しや壁叩きが見られるようになった方が2名
寝ている 30名くらい	

避難開始

余震が続くため、車への避難を決定

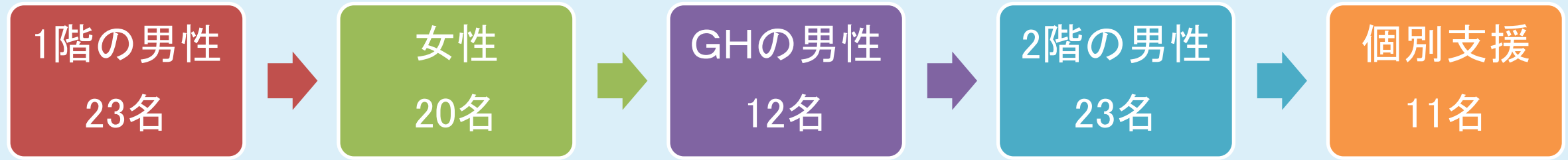
玄関に公用車10台、88名を乗車させる

最初はスタッフ9名 1時間以内の応援4名

乗車したまま運動場に待機

避難完了まで1時間10分ほどかかる

避難の状況



※ スタッフ12名で避難 玄関に車を置き、順に乗車させていく

- ・起きたので、着替えると訴え続ける
- ・場所のこだわりが強いため、スムーズに移動できない
- ・車に乗るまで、隙があれば自室に戻ろうとする
- ・眠気が強く、起き上がって、移動することに時間がかかる

※殆どの方は、指示に応じてくれる





作業棟さん気


社会福祉法人三
気の会三気の里

三気の里


社会福祉法人三
気の会三気の里



余震が続く
恐怖



何が起こっ
ているのか
分からない



情報が錯綜
デマもある



職員が
集まってくる

朝と昼は外で食べる

- 委託業者 LEOC(レオック)
- 毎食、欠かすことはなかった



作業棟で就寝

- 利用者86名（入所＋GH）
女性19名 1つの部屋
男性67名 2つの部屋
- 雑魚寝でも、
自分の布団でなくても、
よく眠れました



その後

4/16 21:30	電気復旧、水道復旧(飲水不可)
4/17 11:00	生活棟に戻る
4/18	3日ぶりの入浴
4/25	生活介護の受け入れ再開
5/9	通常の日課ができるようになる

- GH 3棟(16名)は4/14の地震から入所施設に避難
 - うち1棟(8名)は、補修を行い、3か月後の7/11に再開
 - うち2棟(8名)は、再建を行い、約2年後のH30.3/20に再開

被害(補修や再建等で約2億)

人的被害なし
心労は多分に

全ての建物、
敷地が
破損や亀裂

地域活動支援センター
大規模半壊

GH 2棟
強度ある平屋に
再建

地震後の利用者の状況

利用者	状況
Aさん	自宅が益城町。仮設での生活が困難なため、短期入所を利用。
Bさん	自宅が半壊したため帰宅できず。10月に再開したが帰園して5日後に他害行為が表出。
Cさん	震災前から予兆はあったが、震災後から特に声出し、こだわり行動が強くなる。
Dさん	余震の度に部屋から出てくる。睡眠がとれない。体重の減少。自宅では、いつでも避難できるよう帽子を被って過ごす。
Eさん	地震に関する質問をする。「真夜中バス乗る?」「地震くる?」「大きい地震は? 小さい地震は?」
Fさん	道路の問題により利用できなくなる(片道1時間)。10kg体重増加。

※全体的に落ち着きのなさが見られる。下痢が増える(水道水の問題)。



じしんのこと

まっていること

なんでもくりかえし
叩いて、夜中に目が
さめた。(2014年)

甲ら甲らすると思っ
た。あてしんて
わかった。(2014年)

おんやのてんじめ
かくすれて、おん
がた。
悪いアフロにかなう
かおんて、ます。(2014年)

じしんはこわかった。
おんまのことにい
こわい。
いまだじしんが
おんした。(2014年)

おんがのてんじ
うんどうはして、い
使かてにこい。(2014年)

じしんのあと、いろいろ
やったりする人がおん
ていると思う。
きたハスなどおん
たことおんて、おん
て。(2014年)

グループホームはま
た修理がてきない。
おんした。(2014年)

ひたまりのやうな
おんしたおんて、
て、おんした。
じしんはこわかった。
おんした。(2014年)

じしんはこわかった。
おんてはとく
わかった。おんま
おんした。(2014年)

2Fのおん
おんした。
おんした。(2014年)

おんわはつ
かよえおんた
は、おんた
おんた。(2014年)

じしんおんた
おんた。(2014年)

ひたまりはか
おんた。おんた
おんた。
おんた。(2014年)

おんたおんた
おんたおんた
おんた。(2014年)

おんたおんた
おんたおんた
おんた。(2014年)

おんたおんた
おんたおんた
おんた。(2014年)

専門的な知見
を借りていなかった
(カウンセリング)

はなしあいのへや 2016. 5.20.

細かな変化を
見逃さず
共有する

4月1日以降、女子転居の
おんた。おんた
おんた。(2014年)

おんたおんた
おんたおんた
おんた。(2014年)

おんたおんた
おんたおんた
おんた。(2014年)

グループホーム → 入所

備えておきたいモノ

- ・水(最低1人3ℓ×3日分)
- ・非常食
- ・仮設トイレ
- ・車用のスマホ充電器
- ・ガソリン(例えば半分以下にしない)
- ・良い人材(育てる)
- ・災害などを想定した支援
- ・ネットワーク など



日頃の支援

人に合わせられる
変更ができる

人、時間、
場所、道具など
柔軟に

「誰が」「どうしたか」のスタッフの力量は問われる
※ 4/16は判断力、行動力、支援力のあるスタッフが多かった



有事の時ほど、人となりが見られる

・4/14前震の時、スタッフ室に6名くらいいた。揺れが収まると同時に年下の職員が「利用者!!!」と目散りに利用者の所に向かった。私はその後を追う形になってしまった。

・4/16本震の時、1時間以内に施設に駆けつけたスタッフは4名

→うち2名は家族を連れて駆けつける

・出勤の有無、応援の有無の連絡がある

→連絡があるだけましと思うが、現場はそれ所ではなかった

緊急時は施設に駆けつける

命を預かっている
仕事



緊急時は
施設に駆けつける

自分の命が危ない時は、自分を守る
家族の命が危ない時は、家族を守る



利用者を守る

スタッフを思う

・4/16 夜勤や宿直で泊まっていたスタッフ

→小さな子を持つスタッフは家族の側に居られなかった

・自宅のある益城町、西原村で被災したスタッフ

→勤務以外は地元の消防団の活動(救助や片付け)

・入社して2週間しか経っていない新人スタッフ

→親元を離れて、すぐに震災

ネットワークの大切さ

- 全日本自閉症支援者協会および九州山口四国ブロック
→ 視察や支援物資
- 九州ネットワークフォーラムおよび全国地域生活支援ネットワーク
→ 翌日から視察、支援物資や炊き出し
- 大津町の施設、社協、役場の方々との繋がり
→ 研修会や交流会をしたりしていたので、特に気にかけてくれた

東京災害対策本部からの派遣

- 在宅の利用者で道路の寸断により、片道25分ほどだったのが1時間かかるようになり、利用が困難になった。
 - 送迎支援のために人員派遣して頂けるということになった。
 - 5/22～7/16の約2ヶ月の間に、述べ13名の方が交代で送迎支援をしていただく。
 - 不謹慎だったかもしれませんが、夜は飲みに出掛け、色々な情報交換ができました。
 - 派遣の必要性を感じ、災害派遣福祉チーム(熊本DCAT)に登録した。
- ※災害支援を受ける際の「受援計画」を考えておく。

反省

避難訓練
マニュアル
非現実的だった

他人事だった
過去の災害を
活かしていなかった

困っている方々を
受入できなかった
福祉避難所としての
役割ができなかった

2011.3.11
東日本大震災を受けて

自閉症の人たちのための 防災・支援ハンドブック

— 支援する方へ —

— 確かな支援へ —

3.11の東日本大震災は、大地震（M9.0）、大津波、原発事故の3つが重なる未曾有の大災害でした。想像を絶する状況の中で、自閉症の人々は「日常がなくなった」のです。避難先を転々とし、住み慣れた故郷を離れて遠い他の地域に移り住まなければならなかった自閉症の人々は、さまざまな経験をし、混乱に追い込まれました。このような状況の中で、自閉症の人々が抱える諸問題が改めて象徴的に浮き彫りにされたのです。

この防災・支援ハンドブックは、厚生労働省の平成23年度障害者総合福祉推進事業の一環として行った調査の結果に基づいて、新たに出版するものです。しかし、原発事故による放射能汚染に対する防災・支援に関する情報は乏しく、今後の大きな課題として残されております。「災害」は日常的な社会システムが機能しなくなる状況です。いざという時に、そして日頃からの自閉症の人々への支援に、この冊子がお役に立つことができれば幸いです。

社団法人日本自閉症協会 会長 山崎晃資

評価できること(手前味噌ですが)

大きな問題なく
避難できた

スタッフ
勤務に穴を空けず
しっかり働いた

利用者
よく頑張りました

たくさんの支援
他施設との繋がり

振り返り、学び、先に進む

あの日、あの時
どうしていれば
正しかったのか？

やるべきこと
足りないモノ
まだまだ、、、

どう守るか？
そのために
どうすればいいのか？

災害、事故、事件など
「対岸の火事」ではなく、
「隣の」「わが家の」と思う

多大なるご支援ありがとうございました

